

# 聞名仏教

第 145 号 毎月発行  
(発行日) 2022 年 10 月 1 日  
発行所: 真宗大谷派念佛寺  
〒 663-8113 西宮市甲子園  
口 2 丁目 7-20  
JR 甲子園口駅下車歩 4 分  
電話 (0798・63・4488)  
(発行人) 土井紀明  
<http://nenbutsuji.info/>  
アドレス nenbutuji6@gmail.com  
郵便振替「東本願寺護持基金」  
00930-7-146886

## 《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉  
毎月 22 日 午後 2 時始  
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み  
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉  
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)  
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

## 攝取不捨

佐々木蓮磨

広瀬守一師は高倉学寮のシンガリともいふべき堅い宗学者でありまして、また一面熱烈な布道家でもありました。師は法話の上で、真宗教学の要義である横出・横超の区別を攝取不捨によつてさばき、「横出の攝取は、阿弥陀如来が浄土から光明を放ち、その光明の尖端において摂めとられるのである。故に仏体と私とが離れているため、真の落ちつきは得られないわけである。だが横超の攝取不捨は、信の一念に如来のフトコロの中に摂め取られるのであるから、ここに生活しているままが仏体と一つになつて、真の落ちつきが得られるのである」と力説されるのがつねでありました。

「自分は今まで弥陀の攝取ということを、よく人にも語り、自分にも味わわせていただいた積もりでありましたが、今から考えると、どうも痒いところ<sup>かゆ</sup>に手が届いていなかったように思われる。今の自分は全く横臥<sup>おうが</sup>の身となり、自分の力というものは一つもない。寝るも起きるも他人のお世話になり、食物も人さんの手<sup>て</sup>でこしらえてもらい、口に入れるのすら、人さんの手<sup>て</sup>をからねばならぬという体たらくであるが、この無力無能の自分が今、現に生かされてもらっているのは、全く他力のお為しわざ、他力のお恵みというよりほかはない。毎日この老いぼれを介抱してくれる婆さんも、ただの人とは思われない。如来様が婆さんの手を通して、私を介抱して下さいのだといたただかれ、嫁が食事をこしらえてくれるのも、

嫁の仕事とは思われない、如来さまが嫁の手を通して私に食事を与えて下さるようにいたただかれる」と述懐されたのでありました。これは実に尊い信仰告白であると思います。如来の攝取ということも、ここまで味わえば理屈や道理ではありませんが、明らかに現実の事実となつているのであります。蓮如上人が畳をたたき、また衣をなでて南無阿弥陀仏に抱かれ、南無とお喜びになつたのと同じ心境ではないでしょうか。如来の攝取ということを理屈にしておれば、いつも自分の実生活とはなれ、感情によつて受けとれば、つねに若存若亡して真の落ちつきというものはあり得ないのであります。今の広瀬老師の攝取不捨の味わいは、理屈でもなく、また単なる感情でもありません。

心平氣に生死せしめる能力」と言われたように、われわれが無智、無能、無力の自覚に立つとき、今、現に生きており動いていること、そのことが全く他力のなさしめであつた、と驚かされるのであります。

ここにおいて「われ生くるにあらざる生かされているなり」「われ働くにあらざる働かされているなり」という人間生活の一大転換が行われ、ここに初めて人間としての真の落ちつきが得られるのであります。この如来の攝取不捨に目ざめなにかぎり、人間として本当の落ちつきは得られないとおもいます。そこで親鸞聖人は「攝取不捨のゆえに正定聚に住す」とも、また「真実の信心のさだまると申すも、金剛の信心のさだまると申すも、攝取のゆえに申すなり」ともお示し下されているのであります。

他力金剛とは、人間の心を堅固に固めることでなく、人間の生きている根拠を明らかに知らせていただくことでありましょう。(了)

# 現代真宗問答

## 10

信心のさだまると申すは、摂取にあずかる時に候うなり。

そののちは、正定聚のくらいにて、まことに浄土へうまるとまでは、候うべしとみえ候うなり。

『御消息集』聖典五九〇頁

とあります」

B「これらの文に浄土に生まれる論理が表されているのです」

A「ええ、アミダ仏の摂取不捨の利益にあずかるから、往生に疑いがなくなり、いわゆる信心が定まって、浄土に往生し無上覚（仏）にいたる、すなわち仏になると仰せられています」

B「ほかにありませんか」

A「宗祖の『和讃』の中に『夢告和讃』として有名な和讃があります。正像末和讃の初めにあるご和讃です。観音菩薩か聖徳太子が宗祖の夢の中で、聖人に告げられた和讃で（康元二歳丁巳二月九日夜寅時、夢告云）と

いう、夢告を受けられた日時（二八五年二月九日午前四時頃、八十五才）まで宗祖は記しておられます。宗祖はこの和讃は自分が作った和讃ではなく、観音菩薩より賜った和讃だとみておられたのでありましょう」

無上覚を悟ることができる、といわれてますね。ただここでは本願を信じる時、摂取不捨の利益にあずかるといわれています。さきほどの御消息では、アミダ仏に摂取不捨にされるから信心が定まるといわれていますが、信心↓摂取か摂取↓信心か、どちらが前でどちらが後ですか」

A「実際、浄土真宗の核心がこの和讃に端的に表現されています」

A「これは同時ですから、どっちからいってもいいのです。本願を信じたから摂取不捨の利益に預かったといえるし、アミダ仏に摂取されたから信心が定まったとも言えます」

### 弥陀の本願信ずべし

本願信ずるひとはみな  
摂取不捨の利益にて

無上覚をばさとるなり

（聖典五〇〇頁）

です。ここにどのようなし

て無上覚をさとる、いわば仏になることができるかが端的にうたわれています。

これもさきほどの御消息の思し召しと同じお心です」

B「ここでも本願を信じる人は摂取不捨の利益にあずかるから、浄土に生まれて

A「ええそうです」

B「では、この事の内容を説明して下さい。本願を信じるとなぜアミダ仏の摂取不捨の利益に預かることができるのですか」

A「まず本願とは第十八願

A「先日、仏教学者の〇博士から（浄土に往生して仏になるという、その論理はお聖教のどこに説かれているか）というお尋ねがありました。これは大事なことで、それについて私の確認した範囲で申し上げたのですが、〇博士が納得されなかったかとは分かりません」

るゆえに、不退の位にさだまると御ころえ候うべし。眞実信心さだまると申すも、金剛信心のさだまると申すも、摂取不捨のゆえに申すなり。さればこそ、無上覚にいたるべき心のおこると申すなり。『御消息集』聖典五八八頁

往生の心うたがいなく

A「こういう論理は今日では宗教哲学の主たる考察課題ですが、この問いに関して宗祖は次のように述べておられると思います」

B「それはどういってお言葉ですか」

A「宗祖の『御消息』の中に述べられている二つのご文を次に引用いたします。

如来の誓願を信ずる心のさだまる時と申すは、  
摂取不捨の利益にあずか

候うとみえてそうらえば、

のことであり、第十八願は  
〈助かる力のない者を引き  
受ける、助ける〉という誓  
いであつて、この誓いは南  
無阿弥陀仏の名号として、

私たちに喚びかけて下さる  
のです。ですから南無阿弥  
陀仏を称えて、南無阿弥陀  
仏を聞くということは〈助  
からぬ汝を助ける〉という  
大悲の仰せを聞くことです」

B 「南無阿弥陀仏の名を聞  
くとは誓いを聞くことであ  
り、アミダ仏の誓いは〈汝

は助からぬものであるぞ、  
そんな汝をこそ丸々引き受  
ける〉の仰せなのですね」

A 「はい。私たちは自我一  
杯の計らいで生きておりま  
す。自我はいつも〈得よう〉

〈掴もう〉〈わかつろう〉にか  
かり果てています。そう  
いうかたちで自我中心的な  
生き方をし、その上で聞法  
をしています。そういう私  
どもに南無阿弥陀仏は〈汝  
は助からぬものである。い  
ずれの行も及びがたき愚悪  
の者である〉とまづ私ども  
の姿を知らせて下さいます。  
その〈助からぬ者よ〉とい  
う仰せを聞いたとき、〈なる

う〉〈分かつろう〉〈信じよう〉  
という計らいの手が全く否  
定されて、今この事実  
に帰せしめられます」

B 「助かつろう、信じようと  
前向きで計らい求めていた  
者が、〈汝は助からぬ煩惱の  
塊に過ぎない〉と知らされ、  
なんとか信じよう、分かつ  
う、得ようとする手が切り  
落とさる、そこに今此処の  
単純な事実に戻らしめられ  
るのですね」

A 「ええ、そう言っている  
と思います。帰らしめられ  
る今此処の事実こそ、アミ  
ダ仏が共にまします場所な  
のです」

B 「今此処に生きている事  
実のところは、現実の  
私の存在はありませぬ」

A 「ええ、今此処の事実は  
私が設定した事実ではあり  
ませぬ。我ならざる量りな  
きはたらき（アミダ）にお  
いて与えられている事実な  
のです。いわば今此処の私  
はアミダ仏と一体になって  
いる事実で、この事実を全  
く知らずに生きてきたのが  
私たちです」

B 「アミダ仏に生かされて

いる〉といわれるのはここ  
のことなのですね」

A 「ええそうです。この助  
からぬ私と知らされた時、  
なんとこんな者にアミダ仏  
が〈そんな者だからこそ引  
き受ける〉と今此処に大悲  
したもうアミダ仏がまし  
すことが南無阿弥陀仏によ  
つて知らされるのです」

B 「助からぬ者だからこそ  
助ける」とのアミダ仏の仰  
せによつて知らされるので  
すね」

A 「ええ、そうです。その  
時にアミダ仏の大悲の心が  
私の心に知らぬ間に届いて  
私の心に離れなくなるので  
す。これは不思議と言うほ  
かはありません。」

B 「私の心に離れない大悲  
の心が知らされるのですね」

A 「ええそうです。そして  
〈助ける〉と喚び続けてい  
たもう我ならざる大悲の  
のちが今ここに私と共にま  
しますということ、それ  
こそ私を撰取して捨てない  
たらきであり、いのちであ  
る、そういうはたらきその  
ものに今この事実

に於て

であうのです。ほのかです  
が」

B 「ほのかながら知らされ  
るのですね」

A 「ええそうです。そうす  
ると〈助ける〉と喚びかけ  
たもう量りなきいのち（ア  
ミダ）は私の外のはたらき  
のみならず、私の中のはた  
らき、いわば私のいのちの  
親、主体であることがそれ  
こそほのかですが知らされ  
ます」

B 「アミダ仏は私のいのち  
の親であるということ  
ね」

A 「ええそれが撰取不捨の  
利益だといえましよう」

B 「アミダ仏の本願のお心  
が届く、それが本願を信じ  
るといふことで、そうする  
と今此処に生きている事実  
に於て、はかりなきいのち  
のアミダ仏に離れない自己  
であることが知らされる、  
それが撰取不捨の利益と言  
うこと  
すね」

A 「ええそうです。現在只  
今が無量無限のアミダ仏の  
いのちに抱き取られ、離れ  
なくなつていくのですから、  
この世が終わればアミダ仏

のいのちと一つになる、す  
なわち〈仏になる〉〈無上覚  
をさとる〉と仰せられる、  
この仰せを有難く受け容れ  
ることが可能になるのであ  
りましよう。アミダ仏に離  
れようがないから、アミダ  
仏の領域である〈浄土に生  
まれるのだよ〉との仏の仰  
せがすなおに受け取られ、  
有難いことだといただけ  
のでしよう」

B 「そういう意味が〈弥陀  
の本願信ずべし 本願信ずる  
ひとはみな 撰取不捨の利益  
にて 無上覚をばさとるな  
り〉のお心なのですね」

A 「そのようにいた  
います。ですからこの夢告  
和讃や〈信心のさだまると  
申すは、撰取にあずかる時  
にて候うなり。そののちは、  
正定聚のくらしいにて、ま  
ごとくに浄土へうまるるま  
では、候うべしとみえ候う  
なり。〉と示された宗祖のお  
言葉は、本願を信じるならば  
浄土に生まれることができ  
るといふ道理を示されたお  
言葉だと了解されます」

(了)

# 極重悪人唯称仏

(難波別院リーフレット原稿)

極悪深重の衆生は

他の方便さらになし

ひとえに弥陀を称してぞ

浄土にうまるとのべたまう

(宗祖・源信和讃)

仏縁の無い一般家庭に生まれましたが、高二の頃から外の世界と内心との間に透明なガラスで隔てられたような実在感のない空虚な状態が日常化するようになりました。

なんとかかしてこの状態から脱出したいと手探りで解決を求めていく中、高三になつて観經の講話を読み、「苦悩を除く法」は称名念佛であるとお話からお念仏を申しましたら、少し心が楽になりました。

これが縁でお念仏に救いがあるのでなかるうかと思ひ、大谷大学(真宗学)に入りましただが、内心と外界との壁は頑としてなくなり、なんとも淋しい感覚はずっと続きました。その頃には真宗の信心さえ得られたら問題が解決するであ

ろうと思ひ、信心獲得が人生の最大課題となりました。

しかし、信心は容易に開かれず、諸先生の講義を聴き、仏書を読み、法話も沢山拝聴しましたが、光は見出せませんでした。

大学を卒業し、やがて東本願寺に勤めるようになった。その頃門衛をしていた木村無相さんに出会い、親しくお念仏の心を聞かせていただくようになりました。

その後木村さんは福井県の老人ホームに移られ、それから仏法の便りを毎日のように頂きました。

信心を得たい、疑いを晴らしたいと念願しながら、いつまでもたつても信心は得られない。まったく困り果てている時に、木村さんがこの和讃に関して、香樹院師の言葉を書いてくださいました。それには、サダ女という人がいかにしても信心が得られず「信心がどうしてもいただけません。い

かが致しましたよ」と香樹院師に苦衷を訴えたところ、師が「称えるばかりでお助け、その外に何もいらぬぞ」

と仰せられたとあり、これを見ても無相さんは非常に有難いと何度もお手紙をくださいました。

私も全く信心も起こらぬ、疑いも晴れぬ、どうしてみようもない状態でしたのでこの思召しは非常に有難く、「我が名を称えよ」の仰せのまま南無阿弥陀仏と称える生活になり、やがて「我が名を称えよ」の大慈大悲が心に届いてくださいました。それ以後、不思議にも外の世界を直に感じるようになり、人生の根本気分が変わったのであります。

(了)

## 【お便り】

名古屋在住M様より

「合掌 南無阿弥陀仏

お念仏様は「助からぬ汝を必ず助ける」の仰せ。

お念仏様をとないただき、聞を重ねさせていただき、いつの間にか南無阿弥陀仏様が心に焼きついてもうはなれては下さりません。なんまんだぶなんまんだぶ不思議であり、なんと有難い事でしょう。

なんまんだぶなんまんだぶなんまんだぶ

今は阿弥陀様に抱かれておられます。なんまんだぶなんまんだぶなんまんだぶ

法藏様には大変なご苦勞をおかけいたしました。なんまんだぶなんまんだぶ

いつも阿弥陀様と二人づれです。なんまんだぶなんまんだぶ

そしていつ命の終りをいただいても阿弥陀様のみ国へ生まれさせてくださいません。なんまんだぶなんまんだぶ

どうか呉々もお身体を大切にしてくださいませ。「聞名仏教」いつもありがとうございます。

どうぞよろしくお願いします。

(了)

## 〈遠方法話予定〉

\* 岐阜別院(岐阜市大門町一。

(電〇五八二六二二三八〇)

十月二十日。午後二時。

講題「生きるといふこと」

\* 西源寺(姫路市東今宿五

の十二の十六)

十二月十日。午後六時半。

十二月十一日。午前十時と午後二時。

## 【住職雑感】

今年の極暑も秋の彼岸を過ぎると凌ぎやすくなってきた。極暑・豪雨と続くと次は極寒の冬にならねばいいが、と勝手な想念が湧く。

安倍晋三氏が亡くなって、今まで押さえつけられていたジャーナリストや言論人たちの発言が一度に吹き出してきたり、五輪の汚職疑惑が急に表面化しだした。又、ウクライナ戦争の影響で、防衛費の急激な増額案や原発の再稼働や増設の提案。まさに秋の空のように変わっていく。

それにしても、保守の先頭に立って来た安倍氏の国葬に大勢の若者がお参りし手を合わせている姿をテレビで見ると社会の風潮の変化に驚かされる。私たちの二十代の頃は反政府、反権力をスローガンに若者達の活動が大変活発であり、また進歩的文化人という人たちがいて盛んに論陣を張っていた。今は皆おとなしい。どうしてこういう風潮になったのか、分からない。またこれからどうなるのか、恐らく誰も予測はつかないと思ふ。ただ身近なことがやつと予想出来るだけであるし、しかもその予想も想定外に終わることが多い。世の中はあてどもなく変わっていく。併し、変わらぬものは、今此処に私たちと共に来ますアミダ仏の摂取不捨の真実である。